



TITLE:

現代インド・デリーのアパレル産業－縫製工ネットワークと状況適応的生産－(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

川中, 薫

CITATION:

川中, 薫. 現代インド・デリーのアパレル産業－縫製工ネットワークと状況適応的生産－. 京都大学, 2017, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20489>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（地域研究）	氏名	川中 薫
論文題目	現代インド・デリーのアパレル産業 —縫製工ネットワークと状況適応的生産—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論は、現代インド・デリーにおける輸出用アパレル布帛製品の生産の仕組みを説明することを目的とする。デリーは、インド最大のアパレル布帛生産地であり、多品種小ロットで比較的単価の高い製品を生産している。ところが、デリーのアパレル産業のほとんどは、近代的な設備や組織を有するものではなく、重層的な請負構造と親方主導の管理運営が支配的である。縫製工は、定着性の低い臨時雇いが一般的であり、体系的な技術訓練も行われていない。そのため従来の研究においては、デリーの輸出生産は、大量で安価な労働力に支えられており、単価の高さは刺繍や装飾の多さによるものと説明されてきたのである。</p> <p>しかし、従来の研究が着目してこなかったのは、グローバル市場への輸出を可能にするデリー布帛製品の固有の魅力と、それを具体化する生産の技術・仕組みである。デリーの布帛製品はインド綿生地 of 風合いの良さを活かした特徴があり、さらに流行の変化に応じて、多くの素材や技術を組み合わせる。その価値は装飾の多さでは決まらず、素材と技術がデザインに適合した、全体的な仕上がりで決まる。ひとつひとつの仕上がりが重視されるため、ライン分業による大量生産は行わず、多品種小ロットの流行製品を縫製工が出来高で丸縫いする。海外注文主から届くデザインやイメージに合うように製品を具体化する縫製には高い技術が要求される。</p> <p>では、移動を繰り返し、さまざまな熟練程度が混じる縫製工たちが、どのようにして高いスキルを要する付加価値製品の生産に関われるのか。本論はこの問いに答えるために、「縫製工のネットワーク」と「状況適応的生産」という二つの視角を設定し、流動的な人材で付加価値生産を可能にするデリーの生産の仕組みをとらえることを試みる。</p> <p>第1章では、問題の所在を明らかにしたうえで、主な調査地であるデリーのオークラ工業団地と、集中的調査を行ったアパレル輸出事業所のP社について概観する。第2章では、インドのアパレル産業の成長と展開の歴史と現状について、統計資料や文献資料を用い、特にデリー地域に焦点をあてながら分析する。つづく第3章では、輸出事業所において、生産工程に沿って専門別の組織に分化した仕事が行なわれているさまを記述し、部門内で親方を中心に技術的な洗練がなされ、各部門が組み合わせあって輸出生産が成立するまでのまとまり方を描写する。次に、第4章において、定着性の低い臨時工の移動の実態を示し、デリー地域の現場を移動しながら技術形成を行う縫製工ネットワークの仕組みを明らかにする。第5章では、現場でなされる技術学習のありかたを</p>			

検討し、さまざまなバックグラウンドをもち、異なる技術レベルにある人びとの間で、現場の仕事を通じた関係性が新たに築かれており、そうした仕事縁を通じて、現場ごとにインフォーマルな師弟関係が構築されていることを示す。最後に第6章において、技術レベルが非均質な縫製工が集まっている現場において、いかに効率的生産の運営がなされているかを検討する。そこでは、多品種の需要変化に合わせて、親方が各縫製工の熟練度を見極めて製品を配分して管理する方法と、熟練工と半・非熟練工同士が互いに協力と分業の調整を行う方法を組み合わせることで、状況適応的な管理・運営がなされていることが明らかになる。

結論では、以下の三点を指摘している。1) デリー・アパレル輸出産業は、多様な布帛の素材生地とアクセサリを組み合わせで魅力ある製品を作り出しているが、それは各分野について専門的知識を有する親方と、各部門を組み合わせることを専門とする管理者たちの、専門分化と組み合わせによって成立している。2) 都市部で形成されるアパレルの仕事縁と、地域社会の地縁血縁をもとに構築される縫製工のネットワークが現場への参入と移動、そして技術学習を支えている。3) 丸縫いを基本とする方法が、インドの素材生地の特性を活かしたアパレル生産にむすびついており、仕事を親方が配分管理するだけでなく、熟練工と半・非熟練工が状況適応的に分業することで、需要変化に対応できるより合理的な生産と学習が可能になっている。

(論文審査の結果の要旨)

従来のアパレル産業研究は、グローバル分業のなかで途上国企業がどの程度の高度化を達成したかに着目することが多かった。つまり製品の高付加価値化のために技術移転・品質管理・技術訓練などがきちんとなされているかという基準から企業を評価してきたのである。この観点からは、インド・デリーにおけるアパレル産業の大半を占める中小事業所は評価が低いものにならざるを得ない。実際、従来の研究は、デリーのアパレル企業は近代化が進んでいない後進的なもので、その競争力は中小企業の保護政策および安価で豊富な労働力そして装飾の量的な多さに主に支えられていると論じてきた。

それに対して本論文は、デリーのアパレル輸出製品がもつ独特の魅力、そしてそれを支える高度で固有の技術に着目するべきだと指摘する。デリーの布帛製品の特徴は、インド綿生地風の風合いのよさを活かした高度な仕上がりにある。ライン分業による大量生産が可能なニット製品とは異なり、素材の不均質な魅力を活かすデリーの布帛製品は、多品種小ロットを縫製工が出来高で丸縫いする。しかし、縫製工たちが企業間の移動を繰り返し、熟練程度は均質化されていない。こういった状況で、デリーのアパレル産業は、グローバル需要に合わせた付加価値製品の効率的生産をいかに実現しているのか。本論文は、現場での地道で緻密な調査にもとづき、企業の枠を超えて構築される縫製工のネットワークを通じて技術学習と企業間移動が行われること、熟練工と半・非熟練工の個人的な師弟関係を基礎として状況適応的に分業することで、丸縫い的な品質管理をしながら需要変化に対応できる合理的な生産が可能になっていること、を指摘している。

本論文の学術的な意義は、以下の3点である。

第一に、デリーのアパレル産業の生産組織・生産過程および縫製工の移動経路・技術学習過程などについて、長期の参与観察にもとづく非常に詳細で綿密なデータを提供したことである。アパレル産業についての研究は多いものの、デリーの事業所にここまで深く密着して、包括的かつ詳細なデータを提供した研究は国際的にも唯一であり、きわめて高く評価される。こうしたデータ収集は、高いヒンディー語運用能力とレポート形成力をもって、17ヶ月におよぶ長期の臨地調査を実施したことにより、初めて可能になったものである。

第二に、世界のアパレル産業に広く目を配りつつも、比較の視点から、デリーの布帛製品の独特の魅力に着目して、その国際的な競争力を支える仕組みを、地域の素材と技術の固有性そしてそれを活かす生産組織・生産過程また技術学習のありかたから説明したことである。インドの衣服産業については、伝統工芸論において地域固有の素材や技術を描写する研究はこれまでもあった一方で、アパレル産業研究の観点からは主にグローバル分業論の枠組から産業の高度化の欠如と労働力のインフォーマル化の問題につ

いて論じることが一般的であった。本論文は、グローバル需要に対応しながら国際競争力を持続的に保っているデリーの布帛製品の地域的生産基盤を解明したものであり、グローバルと地域が交差するきわめて現在的な産業動態を活写し、一見不合理に見える現実の状況適応的な合理性を明らかにしたことは大きな貢献である。

第三に、「縫製工のネットワーク」と「状況適応的生産」という枠組を提示し、アパレル産業を事例とした経験的なデータにもとづきながら、南アジア型の社会経済発展経路の産業的展開について理論的に理解するための端緒を開いたことである。本論文が導入した視座は、インドにおける労働者の移動や技術学習のありかた、また現場での分業形態についての議論に特に重要な示唆を与えるものである。従来の研究は、南アジア型の発展経路について主に歴史的観点から論じたものや、現在の産業発展のあり方について主に統計資料や短期訪問調査にもとづいて論じたものが多かった。本論文は、南アジア型の産業発展の現在的形態について、現実にも密着しながら、経済と社会をまたぐより総合的な理解の枠組をもたらすフロンティア的な研究であり、その学術的な意義は大きい。

以上のように本論文は、現代インド・デリーにおける輸出用アパレル布帛製品の生産の仕組みを綿密な観察にもとづいて明らかにしたものであり、インド・アパレル産業がグローバルな需要に対応する固有の形態について新たな理解の可能性を示した優れた研究である。それは南アジア地域研究および社会経済学と経済人類学に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。